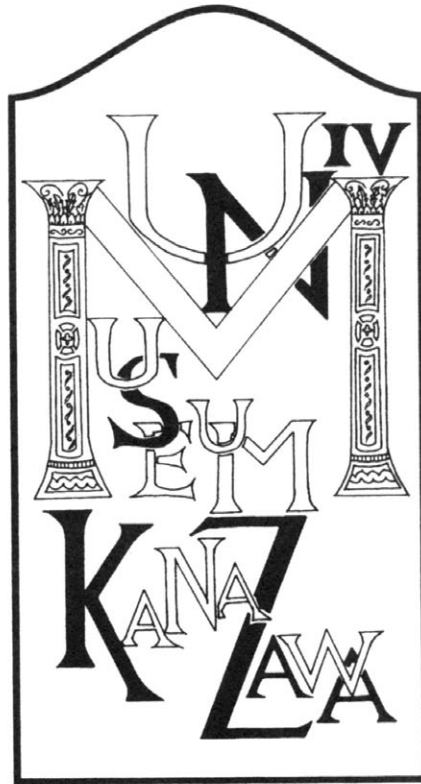


金沢大学 資料館 だより

NO. 11



KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM

ISSN 1342-0380

資料館での開催の展覧会から 再興九谷・松山窯展

佐々木達夫¹・在田則子²・中村慎一³・
波頭桂⁴・橋爪直子⁵

金沢大学考古学研究室は、再興九谷の松山窯跡を1979・80年に発掘した。その研究成果を地域社会に公開するため、金沢大学考古学研究室、金沢大学資料館および古代学協会の主催による展覧会を資料館で開催した。期間は1997年11月5日から30日。展示に係わった学生は、荒木麻理子、泉亜依子、笛吹正徳、小栗孝明、勝俣竜哉、塩谷佐和子、菅野美香子、中野百合子、西井アカネ、野村昌代、藤川知穂、森由佳、山下篤志の13名の博物館実習生である。主な展示資料は、出土品70点、解説パネル5枚。当時の窯業のあり方を視覚的に示そうと、各種の陶磁器を素焼の資料や窯道具と併せて展示し、また現在も残る窯跡を訪れて撮影した写真を活用するなど工夫がなされた。6日午後にはギャラリートークを開催し、30名を越える入館者に学生が展示解説を行った。会期中、古代学協会の広報活動により、北陸中日新聞と金沢学生新聞に記事が掲載された。

松山窯は再興九谷の一つで、石川県加賀市松山にある。嘉永元年(1848)、大聖寺藩が山本彦左衛門に窯を築かせ、粟生屋源右衛門、松屋菊三郎らを招いて焼いた御用窯で、松山御上窯とも呼ばれ、文久三年(1863)頃民営に移り、明治五年(1872)頃閉窯した。

1979年に明治初期の登窯、素焼用平窯、工房、色絵窯、廃品捨て場、1980年に江戸時代の登窯を発掘し、幕末明治初頭の一貫した九谷焼生産工程のあり方、日常生活用具の種類と変化が判明した。灰釉陶器、染付、褐釉陶器、色絵が出土した。

発掘した遺構は三時期に分かれる。第一期は7室の登窯(第1登窯)で、窯の下方斜面に廃品を捨てる。新しくなる第二期は堆積した廃品捨て場上に平坦面を作り、素焼用平窯を築く。最終段階の第三期は長さ9メートル、幅4メートルの5室の登窯(第2登窯)を以前の窯跡上に築き、素焼窯を廃する。

第三期は、最終捨て場の1層から「□治五一月吉日」銘の色見碗片が出土し、2層から「□治二巳夏日製之」銘の染付燭台が出土した。他に、「大日本九

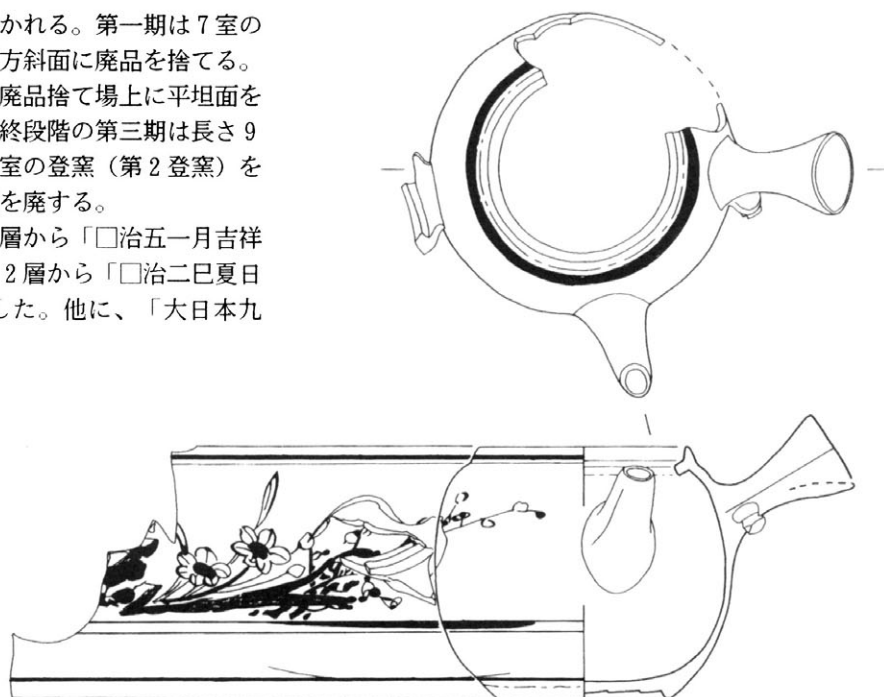
谷」「木下直正」の銘もある。『石川県江沼郡史』に「安政年間山本彦左衛門なるもの之を創始し、明治元年の頃能美郡串村の人木下某之を襲ぐ。・・明治五年に至り、廃絶に帰せり」とあるのに合致する。第二期と第三期は幕末であるが、明確な創始時期を出土品は伝えない。

出土した陶磁器は染付、白磁、黒磁、青磁、鉄絵磁等の磁器と、色絵、灰釉や褐釉の陶器、及び素焼である。窯道具は円筒形サヤとハマが多い。

陶器が多く、碗、皿、鉢、大皿、大鉢、向付、搦鉢、片口、德利、杯、台付杯、水注、水指、壺、かめ、土鍋、土瓶、急須、卸し皿、灯明皿、植木鉢等の日常生活用品がある。素地は松山の陶土を用いた灰色素地が主で、磁石を混ぜたものは灰白色になる。釉は灰釉、鉄釉を主とし、青磁釉、青釉、白濁青釉、長石釉、石灰釉がある。

磁器は陶器より少なく、小品が多い。染付が多く、次は白磁である。碗、皿、鉢、杯、急須、壺、德利、香炉、水注、器台等がある。白色と乳白色素地を小型器に使い、松山の陶土を少し混ぜた灰白色素地は量が多い。耐火度は低く、轆轤製が主で、德利や杯は型製もある。染付には山水、草花、人物、動物、鳥等を描き、銘は九谷、九谷製、永楽、九谷永、貴、大日本九谷製、大日本九谷木下直正造等がある。九谷は第一期から用いるが、永楽は第二期だけ、大日本九谷は第三期だけである。色絵の色見片もある。三角錘状の支えを作る「松山」刻銘のある土型も出土した。

¹文学部教授 ⁴文学部助手
²資料館事務補佐員 ⁵資料館事務補佐員
³文学部助教授



松山窯出土 染付急須 R104 器高6.2cm 口径5.2cm 底径4.2cm

他大学の資料コレクション 形象化されたミュージズの技

五十嵐嘉晴

金沢美大の学術資料としては、図書以外に当然ながら美術品類が挙げられます。元教授や美大出身者の作品はかなり収蔵されています。更に毎年、学部や大学院の卒業・修了制作の中から学校買い上げとなった作品が校内にあふれてきています。

美術資料の中心となっているのは、昭和41年に元美大教授の北出塔次郎氏が寄贈した「北出コレクション」200余点で、そのほとんどは国内外の陶磁品です。このコレクションには常設展示室があり、学内者だけでなく市民の団体鑑賞などの対象ともなっています。ことに平成5年から美大の設置者金沢市の肝煎りで多額の芸術資料購入費が配されてからは、芸術院会員の作品、ブルデルやマリノ・マリニーの彫刻、ゴヤの版画集などが収集されています。標本・教育参考品としての石膏像も学内の各所に配置されています。また学術資料としては、学校創設期から存在する琉球紅型紙102点（伊勢型紙も含む）や、昭和56年に購入した19世紀のワイマール美術館が所蔵していた建築工芸デザイン手本集1500余枚、平成7年に寄贈を受けた20世紀後半の欧米のポスター100点、イコン、世界のガラス工芸品、世界の著名なデザイナーによる椅子などがあります。

校舎の廊下や諸展示場には美術品が展示されて美術大学らしい雰囲気を作り出し、さながら学校全体が美術資料館のようでもあります。また美術品は学外各箇所での展示に貸し出されたり、学外で公開展覧会が催されることもあります。シモーネ・マルチーニの絵画の復元模写作品は、ひときわ光彩を放ち最近NIKKの日曜美術館で紹介されました。

このように美術大学は美術館に似た面があり、美術大学と美術館はきりはなせないものなのです。むしろ美術館が先で、それに附随して教育研究機関が出来たルーブル学院などの例も見られます。世界史的に振り返ってみれば、詩歌・歴史などを司る古代ギリシアのムーサ達の殿堂としてのムーセイオンは、この女神達



受胎告知(復元模写) 石原靖夫
原画:シモーネ・マルチーニ

の分野の資料館や教習所であり、やがてミュージアムとなりました。今日では、ミュージアムは博物館だけでなく美術館の意味にもなっています。またムーサの名から、モザイクなど美術関係の言葉も派生しています。すなわちミュージズは言葉や音の分野から、視覚的な造形作品・資料の館に名を冠することになったのです。美術学校と学芸・美術資料館との関連は、人々の意味付けの中で歴史的必然として形成されたのです。美大の資料は、この形象化されたミュージズの技の成果を研究・教育に役立てるためにあります。

ところで美大の資料はまた、大学や附属美術工芸研究所の研究事業の成果により増大しています。例えば試作研究としての、昭和51年から6年間にわたる「新しいデザインによる九谷焼上絵付の研究」による30点、「婦人服への加賀友禅の応用とデザインの研究」による18点のドレス、昭和57年から3年間かけた「加賀象眼と金沢漆器の新分野への応用とデザインの研究」による国際会議用テーブルウェア、壁面装飾・象眼組み込み漆パネル、人間国宝などに制作依頼した漆手札見本や彫金・象眼見本、「金箔の新分野への応用研究」等が挙げられます。これらは、学内だけでなく全国への依頼や協力を得て行われました。平成8年からは「世界の金箔の総合調査」を開始し、貴重な資料を収集しています。

美大の上記の研究事業や資料収集では、地場産業や金沢市の文化政策との関連や、県立美術館や市の美術関係施設との役割分担も念頭に置かれています。近年では、美大の「芸術資料整備委員会」が美術・学術資料について協議・選定、購入決定をしています。委員会の構成は、学長を長として運営評議員6名と事務局長、市の助役と都市政策部長が委員メンバーとなっています。その収集方針は、次の通りです。



インド金箔調査報告展 平成9年7月

世界の博物館

リンネ博物館・資料館・植物園

—世界の至宝収める植物資料館—

藤 則雄

- 1 本学卒業生、教員、非常勤講師等のうち、顕著な評価を得ている作家の作品
- 2 特色あるコレクション
 - A. 今日まで形成されてきた一定の方向を発展させる
 - B. 新たな視点からの形成
- 3 美術・デザイン標本類
- 4 加越能美術品

また購入理由や価格の妥当性を明確にする手順を定め、学外識者の評価を求めることも出来るようにしてあります。さらに毎年、資料収集を自己点検評価の対象としています。

ミュージアムを持つ大学は幾つも存在しますし、東京芸術大学では大規模な大学美術館を建設していますが、残念ながら金沢美大には、上記の美術品を管理・展示する資料館も美術館も制度としてはまだ存在していません。そのため美術品や工芸技術資料については附属の美術工芸研究所が管理・運営し、書道関係、絵手本・稿本、画稿、版画などの一部は図書館が管理していますが、学内の諸専攻が収集や管理・展示・活用のイニシアティブを取っている部分もあります。学内には、これらの管理・活用を統合して資料館または美術館を求める気運があり、その実現が願われています。

(金沢美術工芸大学附属図書館長
芸術資料整備委員)

博物館(資料館)の有無、質と量、その在り方は、その国の文化水準のバロメーターであり、大学の学問的評価の指標である、とも云われている。

ノーベル賞・福祉・メルヘンの国—スウェーデンの首都ストックホルムから北約100kmに、Upland州の州都・学都・宗教都、人口数万のウプサラUppsalaがある。かつてはこの国の首都でもあった。ここに、世界屈指の古い創設、約550年の伝統を有するウプサラ大学がある。

この大学が世界に誇りうる施設には数々あるが、その中にリンネ博物館・資料館・植物園がある。

リンネ Car von Linné (1707~1778) の名は、自然科学、殊に、自然史学者にとっては忘れえぬ科学者の1人ではある。牧師の子として生まれ、世界に冠たるウプサラ大学で医学・植物学を学び、後年教授として分類学の基礎を確立し、「植物哲学」(1751)・「自然の分類系」(10版は1758)等の名著を刊行。特に後者は生物分類学の宝典であり、世界の至宝とも云われる。生物名が国によって異なることの学問への不便さに即して、学名として二名法(分類単位の属名と種名を併記する命名法)を創設したことにより“分類学の祖”と賞されている。このリンネを記念しての博物館には、資料館・植物園等も附置され、リンネの名著・採集資料も保管されている。のみならず、世界の殆どの植物が保存され、永久保存のために栽培もされ、一般にも公開されている。他に、リンネの教え子や同学の学者の資料も保存され、展示に供されている。

江戸時代末期にオランダ人を名のって長崎出島に渡来したツンベルグ Caroli Petri Thunberg は、江戸への往復で採取した日本の植物に関する名著“Flora Japonica”日本植物誌(1784)と共にその措葉も保存されている。

因みに、ツンベルグが日本の国土・国民・農業・産業・貿易、彼の専門の植物・動物等の紹介をした功績は大である。日本の本草学者は彼に植物葉体や種子を贈り、彼は医学や植物の書物を与えた。特に、桂川甫周と中川淳庵に外科手術を教え、両人は日本の薬草を



C.von Linné
・リンネ博物館(資料館)・リンネ立像・リンネ家の写真

CAROLI PETRI THUNBERG
 MED. DOCT. PROF. REG. ET EXTRAORD. ACADEM.
 CAES. N. G. REG. SCIENT. HOLMENS. SOCIET. LITTER.
 VPSAL. PATRIOT. HOLMENS. BEROLIN. N. SCRVT.
 LVNDIN. HARLEMENS. AMSTELDAM. NIDRO-
 SIENS. MEMBRI

F L O R A
 I A P O N I C A
 SISTENS
 P L A N T A S
 INSVLARVM IAPONICARVM
 SECVNDVM
 SYSTEMA SEXVALE EMENDATVM
 REDACTAS
 AD
 XX CLASSES, ORDINES, GENERA
 ET SPECIES
 CVM
 DIFFERENTIIS SPECIFICIS, SYNONYMIS PAUCIS,
 DESCRIPTIONIBVS CONCINNIS ET
 XXXIX ICONIBVS ADIECTIS.

L I P S I A E
 IN BIBLIOPOLIO I. G. MÜLLERIANO
 1 7 8 4



C.P.Thunberg

ツンベルグの名著「日本植物誌」(1784,初版本)の表紙

与え、日本の科学の実態を教えた。ツンベルグは、この二人の優秀な能力に驚嘆した。この二人は、後に杉田玄白等と「解体新書」の翻訳刊行に参画した。ツンベルグの「日本植物誌」は、ドイツの日本研究者のシーボルトによって、コピーの1冊が伊藤圭介に贈られ、伊藤はこれにリンネの「植物分類表」を付して、1828年「泰西本草名疏」を刊行した。なお、伊藤は、後年東京帝大教授となり、日本最初の理学博士となった。若き同僚の1人に牧野富太郎があった。

ともあれ、事ほど左様に、記せば尽きぬ数多くの世界の至宝の資料が大切に保管され、これ等の珍宝がすべての人々に差別なく情報公開され、研究・教育の発展と科学の普及のために供されている。

スウェーデンの名城—ウプサラ城を眺む伝統あるウプサラ大学キャンパスの一角に、アテネのパルテノン神殿に模して建てられている博物館・資料館、そして、附属植物園は、まさに世界の至宝である。

金沢大学資料館の在るべき姿の一例ではある。金沢大学資料館の更なる充実と発展とを大いに期待したい。

(金沢大学名誉教授・金沢経済大学教授)

文化財の保存と修復 ヨーロッパの修復事情

川口 法男

私達の海外修復施設視察の第一歩はロンドンから始まった。ヒースロー空港のロビーには京都時代の同僚フィリップ・メレディス氏の懐かしい顔があった。彼は京都での長い修行期間を経て、数年前からオランダのライデン国立民族学博物館で東洋美術部修復センターの所長をしているのだが、わざわざここまで足を運んで出迎えてくれたのである。

空港を出てバスに乗り込んだのは午後4時半頃だったが、2月のロンドン郊外はすでに夜の闇に包まれていた。ホテルに荷物を置いて軽い夕食をとるために街にでる。オレンジ色の街灯がとても印象深かった。そのやわらかい光の中では人の歩みも非常にゆっくりしたもの感じられた。その日は長旅の疲れのせいか深い眠りにおちた。

翌朝、フィリップ・メレディス氏に案内してもらい最初の視察先であるThe British Library (大英図書館)を訪れる。この図書館は大英博物館にその基礎を置いている。大英博物館開設の百年後、すなわち1853年に同館内に図書館が設けられたが余りにもその規模が増大したため、1973年に英国初の国立図書館として独立した。日本美術の収蔵品の大半は姉妹館であり母体でもある大英博物館が所蔵しているが、大英図書館にもフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが日本からもち帰った写本・版本・地図などが3000冊以上、その他に住吉如慶筆の「源氏物語画帖」や桃山時代に描かれた「伊勢物語図会」「百合若大臣絵巻」といった名品が所蔵されている。

大英図書館の修復室内部は私達の目にはとてつもなく広く感じられた。実際5人ほどのスタッフが充分すぎるほどの広さの中で修復作業をおこなっていた。主任のマーク・バーナード氏は人なつっこそうな笑顔で私達を案内してくれた。このスタッフに混じって日本人女性の松岡久美子さんが保存科学者然とした姿で立ち働いていた事は、彼女の情報を知らなかった私達には意外であり、頼もしくもあった。ここで見せてもら



大英図書館修復室

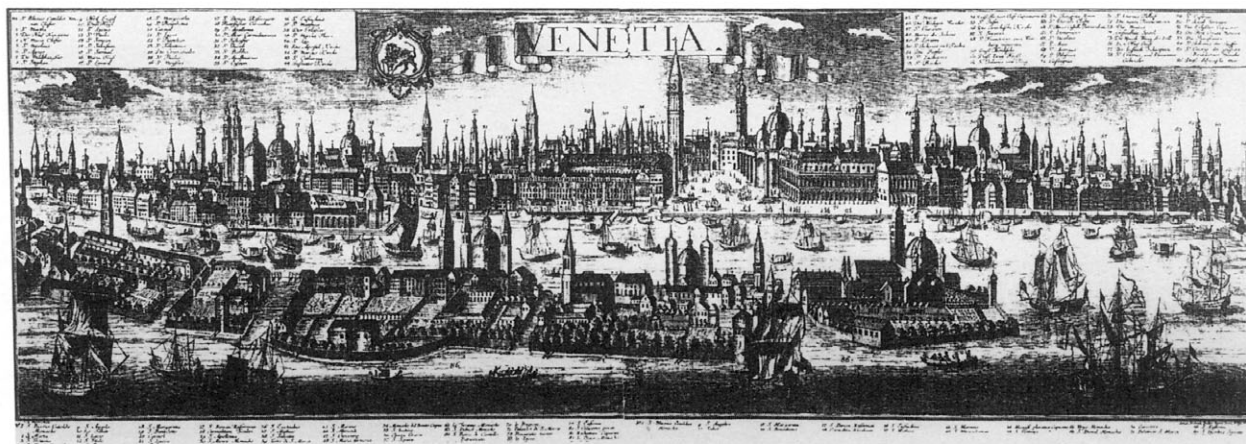
った修復品はスタイン博士がイギリスにもたらした敦煌関係のものがほとんどであった。卷子装にされた敦煌経はまさしく和紙でもって裏打ちの技術が施されていた。併しこれも日本の修復技術がこの図書館でも踏襲されているからに他ならない。数多い敦煌經典の中にはかなり昔に応急処置を施されたものも少なくないが、それらのものはハトロン紙のようなもので見るも無残に糊付けされている。当然の事ながら昔のヨーロッパ人は東洋の美術品を所持してはいても、その製作過程を知らないが故に修復する事もままならない。彼等に為しえた事は破損した所を固い糊や合成糊でがんじがらめにする事だけであった。だがそれは皮肉にも傷んだものを更に傷める結果にしかならなかった。ところが今から20年程前に私達の大先輩であるイギリス人や日本人が保存修復の技術をこの地にもたらした。特に日本に於ける裏打ちの技法というものは熟練を要するのみならず、糊の濃度というものに非常な重きを置く。つまり接着可能なギリギリのところまで濃度を



おとす事でよりソフトに仕上げる事ができるというわけである。これを無視すると保存修復の要ともいえる可逆性の問題に背を向ける事になる。文化財は一度修復されたらもうそれでよいという質のものではない。例えば私達の手掛ける絵画や書蹟の場合、長くても150年~200年で次の修復の時が巡って来る。その時に劣化した作品本体に補強材がガッチリとくっついていれば当然弱い方が先に壊れていく。つまるところ作品そのものは消え失せて、補強材が文化財の代わりをする事になる。やはり私達の仕事はすごい・・・という事には決してならない。ここに可逆性の問題の所以がある。極端に言えば文化財修復では補強材が先に壊れる方が理想なのである。とはいっても私達の選ぶ和紙は相当に強い。そこで媒体としての糊の濃度が重要になってくる。実際紙と紙を接着する場合に私達はかなり薄い糊を用いるので、初めて裏打ちを経験する外国の修復家達は一様にその薄さに驚きの色を顕すほどである。

ところで大英図書館で修復された敦煌経は私達の目の前で実にしなやかに開かれていった。おそらく正しい裏打ちの技術がここでも生かされているのだろう。そしてそれは彼等が考案し製作したという太巻軸に巻かれていた。又、經典の断簡などはエチレンシートに挟みこんで周囲をミシンで縫うという方法がとられていた。これによって外気は遮断され中の文化財は保護される事になり、展示や取り扱いも楽になる。そして取り出したい時にはミシン目はずせばいつでも出して見る事ができるのも利点である。大英図書館の修復室では保存科学と伝統技術がほどよく駆使されているようだ。

(金沢文化財保存研究所所長)



卒業の活躍 博物館に勤めて

学芸員 小西 洋子

私は、平成二年に文学部史学科（日本史研究室）を卒業して、今の職に就きました。一応九年目に突入したことになります。この九年が長いか短いかは難しい所ですが、本人の実感としては未だ半人前という感じです。年齢的にも下から二番目です。つまり、今から書く話は「下っぱ学芸員」から見た学芸員の仕事ということになります。

学芸員の仕事は、皆さんご存じのとおり、資料の収集・保存・調査・研究、そして普及・教育です。ただ、この割合が各博物館施設によって異なり、それが博物館を特徴付けることにもなっています。また、これらの仕事に伴う事務をどの程度学芸員がしなくてはならないかということも、その博物館の規模によって違ってきます。

私の職場では、総務課がお金にかかわる事務の大半をしているので、学芸員が備品購入や職員の給与に関する事務をすることはありません。それでも、資料（写真を含む）の貸借や寄付受納、特別展に関わる事務等はかなりあります。私の場合、平成八年度まで資料の貸借や特別利用などの仕事を担当していたので、それが仕事時間の大部分を占めており、その他は特別展の準備に追われていました。私の職場は、年に4回の特別展+企画展が数回あり、それはすべて自主企画でやっている博物館としては非常に多い方なのです。

したがって、資料の調査・研究ということは勤務時間にはほとんどできず、特に最初の数年は特別展や館内の講演会・古文書講習会の準備も勤務時間にはできず、家に持ち帰っていました。三・四年過ぎると、なんとか館の仕事に関わる調査・準備は勤務時間でできるように努力できるようになりました。現在は、比較的事務量の少ない部門の担当になったので、館の仕事に関わる調査はほぼ仕事時間中で処理しています。

私自身もそうなのですが、研究を続けたいからという理由で学芸員を志望する方が多いと思います。しかし、研究できる職場環境にいる学芸員というのは非常に少ないと思います。自分の研究はあくまでも自分の時間でやるしかないことです。しかし、悲観すること



石川県立歴史博物館



はないと思います。学芸員は広い知識が要求されます。その場その場で、自分の専門外のこともかじらなくてはなりません。私自身は学生時代は中世前期の家や女性の問題というごく限られたテーマで勉強していました。しかし、就職してからは近世文書を見る機会も増え、考古学や民俗学の人と話をすることもあって視野が広がった気がします。文献史学では見落としがちな美術工芸・歴史考古資料のありがたみも実感しています。自分のペースをつかむまでは大変ですが、この環境を生かすも殺すもその人次第、というところでしょう。（私が生かしているかは、わかりませんが。）

公立博物館をとりまく文化財行政そのものの状況が厳しくなっている今日この頃、博物館もイベント性が要求される傾向があります。イベントが増えればその準備に追われ、資料の整理事業が手薄になるだけでなく、イベントそのものの質を維持することも難しくなります。長い目でみれば資料の調査整理・研究も公共性の高い仕事だと思うのですが、速効性のないことはなかなか評価されません。また、展示の質の高さと入館者の数は必ずしも比例しませんし、一般の来館者の欲しい情報とこちらの流したい情報は必ずしも一致しません。歴史を学ぶ者として、力量の問題はともかく、良心的な仕事をしたいと思う一方、「学芸員の自己満足」に陥ることも戒められるべきだと思っています。常にジレンマの中で試行錯誤している状態です。

ところで蛇足ですが、私は現在、埋蔵文化財の調査をしている夫と一歳の息子の三人暮らしで、今年中にもう一人家族が増える予定です。近年、女性の学芸員も、学芸員希望者も多いようですが、結婚して子供も欲しいという方は、それなりの配偶者（配偶者の理解と協力は絶対不可欠です）と覚悟が必要だと思います。公立博物館の場合、育児休暇や育児時間制度は整備されつつあるとはいえ、自分の研究時間を確保するのが非常に難しくなるのですから。しかし、私でもなんとかやっていることですし、少なくとも仕事中には専門分野にかかわっていただけるというメリットがあります。大変ですが、やりがいもあるので、これから学芸員になるつもりのみなさん、一緒にがんばりましょう。

（石川県立歴史博物館）

資料館彙報 (平成9年8月～平成10年3月)

- 9月：「資料館だより」第10号を発行した。
- 11月：文学部考古学研究室及び資料館主催の「再興九谷 松山窯展」を開催した。
- 11月：資料館主催の講演会「古文書の修復について—付属図書館蔵『成瀬日記』の修復を中心として—」
(講師：金沢文化財保存研究所所長 川口法男氏)を開催した。
- 11月：「金沢大学資料館紀要」(仮称/隔年発行)の発行に関する内規作成委員会が発足した。



金沢大学資料館 KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM

〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学附属図書館内
TEL (076)264-5215
FAX (076)264-4051

表紙写真：白糸威六枚胴具足